中高生とともに差別と闘う

涙の『全員リレー』

吉成タダシ

涙の『全員リレー』

パーン！

ピストルの合図とともに走り出した六人の第一走者たち。ぐんぐんぐんぐんスピードを上げていく一団。我がクラスは女子陸上部員のサキ。しかし他のクラスは、全員男子サッカー部員。すぐにコーナーに入り、インコースを取ろうと競り合いになった、その瞬間でした。競り合いに堪えきれず、彼女だけが、我がクラスのサキだけが、激しく転倒したのです。見る見る距離があいていきます。一人だけ置いていかれ、トラックにうずくまるサキ。それでも懸命に立ちあがり、足を引きずりながらも走りはじめます。が、ダントツの最下位。なんとか第二走者へとバトンをつなぎますが、サキはそのままコース上に転がるように倒れ込みました。

「ごめん！ごめん！」

号泣するサキを、近くにいたクラスメイトたちが両側から抱きかかえ、医務室に連れて行きます。その手に掴みかけていた優勝が、一瞬のうちにこぼれ落ちた瞬間でした。でも、一部始終を見ていた、トラックに散らばるクラスメイトは、決してそれを認めはしませんでした。走者に目をやると、なんとか遅れを挽回しようと、最後尾から懸命にバトンをつないでいくのです。ダントツ最下位の六位と五位の距離は、その差を次第次第に縮めていきます。そしてとうとう五位に追いつき、追い越してしまうのです。さらに、転んだサキの思いを託し、何人もの手から手へ全力で、着実に送り継がれていく一本のバトン。そのバトンは、四位との差も縮め、なんと四位にも追いつき、追い越してしまいました。見ている者は叫び、走る者は奥歯を噛みしめ、その思いを一つにしていきます。でも、そのあと抜きつ抜かれつを繰り返し、とうとうラストランナー。結局、順位は第四位。総合成績は、順位を一つ落として第三位。残念ながら逆転優勝はかないませんでした。でもあの姿は、種目名どおり「全員リレー」でした。その日、子どもたちはこのときの思いを日記につづってきました。

清々しい日焼けの思い出

「優勝できる!?と思ったとき、リレーで惜しい結果に。私の後ろの人はすごく走るのが速い人だったけど、私が遅すぎて…。

サキちゃんは最初こけてしまって、それでもすぐに立ちあがって走ってくれました。感動しました。自分ももっと頑張らなければという気持ちになりました。リレーを走ってるとき、周りのみんなの声援が聞こえてきて、走る自分がすごく速く感じました。マッハでした。

みんな嫌がっていた第一走を男子に混じって走ってくれたサキちゃんには、とても感謝しています。

一・二年生の頃は得点の入り方があまり分かってなくて、いい結果でもビミョーなうれしさだったけど、今年は『一点』が大事で、こんなにクラスでまとまって楽しかった体育祭は初めてでした。今日の体育祭は最高の思い出になりました。三年間で一番楽しくて燃えた体育祭でした。

惜しかったのは…今年は日焼けにすごく気をつかったので、例年みたいに皮がベロンベロンにならなかったけど、耳を忘れていました。耳がヒリヒリしています（笑）。」

自分を責める謙虚さ。サキに力をもらったかのように、全力を尽くして走ろうとする清々しさ。そして責めないばかりか、転んだ彼女を気遣い、感謝の気持ちすら感じられるやさしさ。熱い思いを肌で感じたことを、何気なく表現できるお茶目なセンス。子どもたちの懐の深さに、読んでいるこちらの胸が熱くなり、思わず笑みがこぼれてしまいました。やはり子どもたちは、信じるに値する存在だと思わせられます。

みんなが一番

「今日の体育祭、三位という結果に悔しい想いもありますが、すごく楽しかったです。

私は運動が苦手な方で、小学校の時も運動会が大嫌いなタイプでしたが、今年はもう何と言えばいいのか…。言葉では表せないほどです。

サキは転んで足が痛いのに最後まで走って、すごいと思いました。でも、みんなに悪いと思って号泣していました。周りの人も、もらい泣きしてしまいました。それを見て、友達が泣いてたら一緒に泣くって、何か、『めっちゃ仲間』って気がしました。『めっちゃ青春』って感じでした。

みんなで勝ち取った三位なので、誰か一人が責任を感じる必要なんてありません。誰もサキのことを、責めたりしません。むしろ、もっと自分たちを誇りに思った方がいいと思います。本気で頑張ったし、中途半端に終わらなかったじゃないですか。団結力では五組が一位ですよ、きっと。

体育祭第二回とかはないのでしょうか…。もう一回したいです（笑）。」

全国の多くの学校で、毎年のように同じようなドラマが繰り広げられ、どのクラスが一番というものではないのだと思います。敢えて言うならば、どの学校のどのクラスも、きっと一番なのです。

「順位をつけるのはナンセンス」とか、「苦手な者にまでさせるのか」と、人権教育を曲解して言われることがありますが、それよりも大切なことが学べるのなら、こんな素敵なことはないのではないでしょうか。友のために泣けるくらいの思いや、友のために全力を尽くした記憶は、これからの人生にとって何ものにも代え難い、大切な宝物になっていくのだと思うのです。そんな体験の積み重ねが、人を信じて生きられる、大切な土台になっていくのだと思うのです。

（次回「ピンチはチャンス」）

イラスト　中島　亜唯